

アイルランドの結婚風習とその背景について

——ウィリアム カールトンの「ノッポのシェーンの結婚話」——

中 本 誠 一

(一) はじめに

アイルランドのウェイクの中にケルトの風習があり、更にその風習がアメリカへ移民する人々の送別の儀式即ち告別の形式を取ったところにウェイクの特徴がある¹⁾。ケルトの文化がキリスト教の渡来によって、あるものは急速に、又あるものは非常にゆっくりと変化していった。アイルランドの古い法律ブレホン法は急速に衰えたものの一つで、イギリス法に与えた影響は殆どない²⁾。人々の生活全般を支配していた法体系、特に慣習法であればある程その法体系の喪失がケルト文化に与えた損失は大きい。ブレホン法が喪失してもケルトの伝統・風習は神話・民話を含めて広く残った。そして多様な伝統・風習を理解することによって、今日的意味の複雑な問題の原点を知ることになるであろう。

本稿ではアイルランドにおける結婚風習について考察する。又その風習がキリスト教渡来以前の文化、即ちケルト文化とどのような関係があったのかを知る意味でブレホン法について簡単に言及する。筆者は法律については全くの素人であって、アングロ・アイリッシュ文学に対する興味から言及する次第である。本稿を書くにあたり、結婚風習についてはE・エヴァンズの“*Irish Folk Ways*”, ドナハーの“*In Ireland Long Ago*”, ブレホン法についてはP・パワーの“*Sex and Marriage in Ancient Ireland*”³⁾

を主として参照した。

(二) アイルランドの結婚風習について

アイルランドの農村部の女性の平均結婚年齢は28歳ぐらいで、他の国にくらべても高い方である。また男性の場合は更に高く、その上独身で過す人も多い。これは1845—47年にわたる大飢饉による社会及び経済の変化によるもので、それまでは人々の大部分はむしろ早婚によって総てが営まれていた。即ち早婚によって家庭内の労働力が増えたからである。多産であったが途中の死亡率も高く、また貧困の一因にもなった。早婚と多産を支えたものは主食としてのジャガイモの生産が容易であったからである。この大飢饉は主食のジャガイモの不作によるものであったが、文化的遺産にも大きな影響を与えた。先祖代々殆ど変わることなく生きつづけたケルトの妖精、太陽、星、石、樹、花、森羅万象生けるものの中に宿っていた自然力に対する畏怖の念が消滅を始めた。

19世紀初頭までの結婚風習について次の様に述べられている。馴初めとか求愛は市とか、催し物、ウェイク、葬儀とかの集りで始まることが多い。そして相思相愛の二人は上記の場所から駆落する⁴⁾。男性が女性を友人宅とか親類の家に誘拐あるいは合意の上で連れて行く。時には力ずくで行われる場合もあったらしい。駆落した後まもなく女性側の親類の代表が相手側と

1) 拙稿『流通経済大学論集』Vol. 18, No. 2, 1983. 11.

2) Holdsworth, William: “*A History of English Law*”, London, Methuen & Co LTD, 1966.

3) Evans, E. Estyn: “*Irish Folk Ways*”, London, Routledge & Kegan Paul, 1966.

Danaher, Kevin: “*In Ireland Long Ago*”, A Mercier Paperback, 1969.

Power, Patrick: “*Sex and Marriage in Ancient Ireland*”, A Mercier Paperback, 1976.

4) “*Irish Folk Ways*” p. 284.

縁組 (match) の協議を行う。普通娘の世間体を気遣って父親の不本意のうちに合意される。結婚 (wedding) の日取りが決められると娘は父の家に帰ることが許される。結婚の当日、新郎側一行は馬に乗り新婦の住居に向う。そして新婦側の一行と途中で出合う。両者の中から「酒びん競争」(Bottle Race) に出る馬に乗った幾人かが、誰れが新婦の家まで一番乗り出来るか競争する。一行が着くと、新郎新婦が現われてオートミルと塩を添えた皿から、それぞれスプーンで三回飲む。これは悪魔の魔力から身を守るためである。両家一緒になって神父の住む酒場 (alehouse) に行く。これはペナルティー法が施行されていて、ローマン カトリックの布教活動が禁止されていたからである。

神父の婚儀の祝祈のあと新郎新婦のうち早く立上った方が長命とされ、一同身を乗り出して見守ったらしい。パブ (public house) に席が移され宴が始まる。このあと一行は馬に乗り(新婦は新郎側に)、新婦の家に急いで向う。一方多勢の人が丘や高台に集まり「酒びん競争」を見物する。新郎側と新婦側で競われ、新婦の家に早く着いた者が勝者となる。勝者は酒ビンを受け取り宴の主賓に渡す。主賓は新郎に、新郎が最初に飲んで新婦に、新婦は参列者に、殆ど空になるまでまわされ、最後に新郎が残りを振り捨てる。「花嫁ケーキ」⁶⁾ と呼ばれるオートミルと麦粉で作られるケーキを新婦の頭で割る。若い男女がそのケーキのかけらを奪合う。それはかけらを枕の下に入れておくと人生の伴侶の夢を見るからだと言われる。騒々しい宴が始まり、両家とも入り乱れ、時には流血騒ぎも起ったようである。(特に祖先の家系、家柄が異なる場合、新郎なり新婦なりの体面をめぐって。)

一般に百姓 (peasant) は相手の適性を確かめ、家族間の交際、野良仕事の助け合いのできる距離で、仲間内に判る娘と結婚する。契約で結婚が決められる場合、結婚を効果的にするために合意の上で誘拐が行われた。不器量な娘に

対しては「上のせ金」(Dry Money)⁶⁾ といわれる持参金を牛とかそれに相当するものをつけてやった。血縁の近い結婚も土地とか家督を残す意味で、「毛布は二重の方が優れてる」とか「わしらみな大なり小なり親類だ」とか言って行われたらしい。

ブライアン メリマンの詩⁷⁾ にあるように、相手の愛情を勝ち取るために様々な魔術とか縁起があったようである。また年取った男が若い娘と結婚したり、再婚する場合は不自然と考えて、アンダルチアのビトー (vito) と同様に二人にラッパを鳴らして囃したてる。アイルランドの婚礼の中で最も奇妙といわれる風習に「ストロー ボーイ」(straw boy) があり、若い男が麦わらで編んだ仮面とみのを着けて幾人か登場する。婚儀につづいてダンスで遊び興じる時に現われる。ストロー ボーイのリーダーは花嫁とダンスする権利がある。先に述べた「酒びん競争」は幸運な若い二人の両親及び親類が結婚の成立を祝って飲む「祝い酒」(agreement bottle) を思わせる。ダウン地方ではブロス スープが田舎の結婚式の特徴である。式後新婦の家に最初にたどり着いた者にブロス スープが与えられる。また結婚後最初の日曜日の「花嫁ショー」(Bride-Show) に、新婚夫婦が登場することが求められた。二人は手に手をとって坂を野原の下まで走り降りる。そこに石があり輪になった男女が続き、その石に男がキッスする。

アイルランドの田舎では、縁組が一般的な方法でプロの仲人がいて地方の名の知れた人物になる。一般に社交術にたけた抜目ない年長者である。仲人は息子が結婚適齢期(大抵の場合中年になっている。一般に結婚するまではいくつになっても, boy, girl と呼んだ。)で結婚させたいと願う家の主人に代わって動く⁸⁾。息子側の親が定めている娘の親と交渉する。娘が持参する額で折合わず交渉が長びく場合もある。結

5) Ibid., p. 285.

6) Ibid., p. 286.

7) Ibid., p. 286.

8) Ibid., p. 288.

婚は恋願う二人の結合以上に複雑な関係が存在した。

不妊の災は式の最中に糸で結び玉を作った悪意の人によって花嫁にもたらされると考えられた。実際には「足入れ婚」をして石女を避けた。母親は赤ん坊は妖精に誘拐されると思って赤ん坊の服の中にお守りを入れたり、揺りかごの中に入れたりした。男の子に女の子の服装を着せて11歳頃まで妖精をあざむく方法をとった。それは妖精が強い健やかな子供を探して、弱い子と「すり替え」(changeling)⁹⁾するからだといわれる。この「すり替え」の風習は男の子は女の子より死亡率が高かったことに由来する。

ハンフリー オサリヴァンの日記に次の様に結婚のことが記されている¹⁰⁾。「妹の息子シャーマスがキンラノーラ出身のガラントの娘と結婚した。教区のヘニブリー神父が結婚させた。夜明の3時まで食べたり、ホットパンチを飲んだり歌ったりした。私達は誰とも争いすることなく、気分良くのどかに家路に着いた。」わざわざ「誰とも争いすることなく」と記していることから、エヴァンズが言っているように、実際は酒の上でいろいろ悶着があったことがうかがえる。

ウェイクで再々引用したシャン オサリヴァンも結婚について次の様に述べている¹¹⁾。アイランドの田舎では愛情以上に結婚の取決めに経済事情が大変重要な役割を果たした。市やウェイクで縁組がなされ、両家で持参金その他の事が決められた。この風習は今でもある程度継承され、多くの田舎の結婚に関する経済基盤というものを作りあげている。求愛や縁組の手筈はどちらかといえばウェイクでなされ、適齢期の息子を持つ母親は同じように適齢期の娘を持つ母親に会う。ウェイクで近づき、途中で二人の縁談のことを話題にのせる。

トーマス メイスンはアラン島で実際に結婚式に出席した時のことを次の様に語っている¹²⁾。私はアラン島の結婚式に接したことがなかったので、式の招待に応じた。教会からの行進は乗物の外にいる数名が先頭をきり、後にポニーが続き、それから二人を運ぶ乗物は激しく揺れて進む。みんな大声をあげ、ハンカチとかスカーフを振っている。花嫁はアメリカで生活をしたことがある小柄な女で金を貯えている様子であった。ブルーの衣裳を着て、他の女達と対照的であった。島では縁組は家族の友人とか両親によってなされ、縁談成立までかなり厳しく話合がなされる。新婦に財産が贈られるが、新郎の親がまとまった現金とか応分の額が払えない場合もある。このような場合協議がえんえんと続いたようである。ウェイクの後の埋葬と同様に、結婚日の天候についてもいい伝えがある¹³⁾。晴天の場合は太陽が新婦にあたるので縁起が良く、雨の場合は悪いとされる。土曜日の結婚は縁起が悪く、当日の朝カッコーの声を聞いたり、マグパイを三羽見れば良いとか、葬式に出合うと悪いとか色々ある。結婚は人生最大のハイライトであり、その日に翳りを見せるものは総て縁起の悪いものとみなされたようである。

(三) ウィリアム カールトンの「ノッポのシェーンの結婚話」について¹⁴⁾

結婚に関するバラードには“The Wedding of Ballyporeen”, “The Wedding of Biddy M’Crane” “The Wedding above in Glencree” “Lannigan’s Ball” があって、前述のアイリッシュの結婚、パーティーの楽しい雰囲気をよく伝えている。カールトンの「ノッポのシェーンの結婚話」はリーム オフラハティーの「エグザイルへ」にアメリカン ウェイクが見事に描写されているのと同じように、アイリッシュの結婚の風習が描写されている。

9) Ibid., p. 289.

10) Thomás de Bhaldraithe : “The Diary of Humphrey O’Sullivan 1827—1835” p. 41, The Mercier Press, 1979.

11) Osúilleabháin, Séan : “Irish Wake Amusements”, p. 92, The Mercier Press, 1969.

12) Mason, H, Thomas : “The Islands of Ireland”, p. 84, A Mercier Paperback, 1967.

13) “In Ireland Long Ago”, p. 159-160.

14) “Irish Literature” Vol. II, “Shane Fadh’s Wedding” by William Carleton.

カールトンはテイロンのゲール語地区で1794年に生まれている。もっとも1800年頃はアイルランド全土の90%以上でゲール語が話されていたのだから特に強調して書くこともないであろう。しかし結果的にはこの地域はケルトの風習の強い所であり、彼の母メアリーは美声の持主で結婚式で歌い、ウェイクで泣くと、その美事さゆえに人々が周りに集まり、他の人々は押黙って聞き惚れたといわれる。彼はジョイスと同様聖職者にならんと志を抱いたが断念せざるを得なかった。その後彼は再び村に戻りダンスや、ウェイクなどに出かけたといわれる。カールトンは詩聖ロバート・バーンズになぞらえてアイルランドの散文バーンズともいわれる。自ら貧しい小作の出で伝説と民話の中で育まれ、アイリッシュの風習にも精通していた。さて「ノッポのシェーンの結婚話」はご多分に漏れずアイルランドの炉端での民話形式をとり、村の人々がシェーン（主人公）の周りに集まり結婚話を聞かせてくれとせがむ。アイリッシュの炉端話の面目躍如たるものを感じる。

「17歳になる美しい娘メアリーに好意を寄せるディック・キレナンは市とかミサにメアリーと行き来する。又彼女の家にも出入りする。「ねえ、ディック・キレナン」とメアリーの母親は言った。「幸運と幸福以外何もお前に望んでないよ。でもメアリーのことはねえ、あの子はお前に向かないさ。それに家柄を考えても良縁ではないね。メアリーには祖父が残した60ギニーとジャック叔父さんが4年前に彼女に残した2頭の乳牛がいてね、農家にしてみりゃかなりの財産だからね、結婚してもお前には娘を連れて行く農場がどこにあるのかね。長細いエスカーの石がごろごろしている7エーカーの荒地でなくてね。娘を食べさせて貰いたいね。¹⁵⁾」

花嫁となる相手を誘拐したり、力づくで掠奪することを述べたが、前述のディックがメアリーを奪おうとする所を次の様に描写している。

「次のクリスマスまでは何ごともなかったがある夜、フィネガンの家の人々が寝静まってい

るところに、若者の一団が戸口に来て、もの凄いい力で叩くんだ。そして中に人がいるならすぐに開ける、さもなくば粉みじんに砕いてやると罵るんだ。家の者は驚いたけど、母はすぐにメアリーのことだとピーンときたんだ。跳び起きて娘を自分の床に入れ、自分は娘の床に入れ替ったんだ。しばらくして夫のフィネガンが起きて、ローソクを灯して入口を開けた。すると奇妙な声で、“フィネガン、ローソクを消せ、茅葺を燃してやるぞ。おい、肋骨にブスッと一刺お見舞するぞ。” 奴等は当然メアリーの所に突進したんだ。母親は一言も発しなかった。気丈で力もあって、かなり激しくもみあったけど母親はしかたなく連れ出されるハメになったんだ。¹⁶⁾」

物語りではノッポのシェーンが通夜の帰りにこの一団に出合う。そしてこの母親を救出したことからメアリーと交際が始まり恋が芽生える。

「メアリーの母親、その従妹のサラ・トレイノーとメアリー、それにわしの方からジャック・トネランと一緒に2、3本飲んで彼女の父親に内密に駆落ちすることが決まったんだ。落着き先は叔父のブライアン・スレヴィンとこに決めたんだ。次の日曜日に決行することも決まったんだ。叔父の家の人達に準備をお願いして、わしらが着く前に2ガロンのウイスキーを運んどいたんだ。フィネガンの人達だって、わしの友人達だって後味の悪いことは好かんからな。¹⁷⁾」

「翌日叔父がメアリーの父親の元に赴き、すぐに話をまとめてしまった。本当はそんなに難しくなかったようだ。叔父が会う前にもう話が先方に伝わっていたようだ。メアリーはその日のうちに家に連れ戻された。木曜日に親父と叔父と数名の友人とわしが先方に赴いて縁組がまとまったんだ。祖父が彼女に残した60ギニー、13頭の家畜、2羽の鳥、2台のもみがらベッド、シーツ、キルト、毛布、白リンネン2反、彼女が飼っている鷺鳥。こんなに沢山嫁入に貰うことは大変なことなんだぜ。¹⁸⁾」

15) Ibid., p. 514-515.

16) Ibid., p. 515.

17) Ibid., p. 517.

18) Ibid., p. 519.

縁談成立はかなり事前の話合いでまとまったようであるが、ダナハーは困難を極めた話を紹介している。ケリーから100マイルまでは離れていなかったが、ある男女が恋をして、新郎側は賛成したが、相手の父親が頑固で三回も話合がこじれてしまった。最後に話はまとまったが、神父からどんな具合にジョニーの爺をまるめこんだんだいと聞かれて、新郎側の母親は「2, 3人の若い連中に2, 3発銃を撃せて、本気の所を見せたんだよ。」と答えている話を述べている。¹⁹⁾「酒ビン競争」のことが幾度となく出てくるが、この楽しみがなければ、結婚式全体は三文の値打もないと語っていることからして一連の結婚日のハイライトの一つであったようだ。また式当日の様子を次の様に描写している。

「時は7月。前の晩に父と兄がフィネガンの家に行き式の打合せをした。新郎方は10時頃に新婦の家に行く。それから全員馬に乗り神父の所まで行進して式を挙げることになったんだ。トムハンスのパブで多少飲んでから酒ビン競争するダブヒルまで戻る。それで朝早くから起きてな、6時頃から身内、友人、近所の人達が現われ始め、8時頃には大勢になってしまったんだ。8時頃に興奮気味に皆で朝食をすましたんだよ。新婦の所で朝食を取ることは別に珍しいことでもないし、家で簡単に食事をするのが一番よいと考えたからだ。朝食を済まして、各人乗物の所に行き、わしは帽子と鞭を手にして乗馬しようとしたら、叔父がわしに囁くんだよな。両親に跪いて今迄の親不孝を許してもらい、祝福をお願いしろというんだ。それから兄弟、姉妹達からもな。²⁰⁾」

「新婦の家に着くと握手して接吻して、御両家お世辞を込めて挨拶するんだ。朝食が始まり、わしと親類は家の中で、他の連中は納屋か庭ですることになった。食事といっても話が殆どだけどパッチーンを飲んで暫くしてから神父の家に向ったんだ。メアリーは男の様に黒いカスタ帽をかぶり白いモスリンのコートを着て、首に

絹の青いハンカチをまき、幸せを祈って腰に銀のバックルと青いリボンを付けて、美しい髪はアップでなく、ただ両肩に美しいカールを垂らしていた。²¹⁾」

ペナル法によってカトリックの布教が禁止されていたので神父は教会にはいなかった。従って一行は神父のいる所に行き挙式を済ませた。ノッポのシェーンの物語では祝福の後、神父の納屋に行きそこで1, 2時間ダンスをしてラリースプニーの所について飲物を取ったことになっている。前に結婚式の宴席で流血のことも場合によっては起こったと述べたが「ノッポのシェーン」にも同様の描写がある。

「その時、わしの側と新婦側にある種の陰悪な空気があることを察知したんだ。どうして良いか分らなかったが叔父も気付いていてわしに教えてくれた。「シェーン、どうもドラン所とフラナガン所が特に陰悪な感じなんだ。実はな昔の訴訟の事が持ち上ってるんだ。流血があるかも知れんぜ。酒ビン競争なんか格好の口実だからな。²²⁾」

一行がいよいよ酒ビン競争の行われるダブヒルという丘までくると、神父の所に行かないで棍棒を手にして抜けがけを防ぐために見張っている5, 6名の若者のことや、参加する男達がサドルを付けて粗服を着、女達はハンカチをまき、帽子やボンネットにショールを結び飛ばないようにしている様子を描写している。物語ではトラブルが本当に起こり、神父の仲裁が細かに述べられている。そして宴が続き花嫁ケーキが運ばれる。

「その時花嫁ケーキ (Bride Cake) が運ばれた。スンズィー メアリーばあさんが前に出て花嫁を立たせ、椅子に上って花嫁の頭でそれを割った。家中の人達にそのかけらを与えたんだ。お茶の後、老人達は語り合い、若い連中は踊ったんだ。²³⁾」

19) Ibid., "In Ireland Long Ago" p. 159.

20) Ibid., p. 523.

21) Ibid., p. 524-525.

22) Ibid., p. 528.

23) Ibid., p. 529.

以上「ノッポのシェーンの結婚話」から、アイルランドの結婚風習に関する描写を紹介した。本来なら全訳した方が、より詳細な理解を得るのに役立つと思われたが紙面の都合で割愛した。

(四) ケルトのブレホン法について

わが国におけるブレホン法に関する言及は法律の面で殆ど皆無といってよい。近年アイルランドにたいする関心が高まり、少数であるが熱心な研究者達の論文及び訳訳の中で多少扱われている程度である。ホールズワースが「英法史」の中で簡単に英法はケルトの影響を殆ど受けなかった。また注として様々な体系から構成されているが、“The Senchus More”と“Book of Aicill”の二つが最も大きいものであると述べている²⁴⁾。このホールズワースの本は1903年が初版である。一方アイルランド文芸復興に偉大な足跡を残したハイド博士は「アイルランド文学史」の中で特別に一章設けてブレホン法を説明している。

法律に関する論文は本来本質的言葉の意味で文学ではないが、アイルランドの場合非常に多く、有益であるので何らかの注目を払わざるを得ない。1852年政府よりロイアルコミッションに対してアイルランド古代法及び法制度の刊行が依頼され、オドノヴァン及びオカリーがそれぞれ法典を2491, 2906ページ訳訳した。4巻は既出版されたが、2巻は準備に手間取り未だ日の目を見ていない²⁵⁾。そして4巻の内容を説明している。これはアイルランド文芸復興の中で、失われたケルト社会・文化の重要性をハイド博士がブレホン法の中に認めているといえよう。アイルランドにおいてさえ、ブレホン法の紹介はこの程度であったといえよう。

私達は伝説、民話、風習、慣習の中に断片的ではあるがブレホン法の施行の痕跡を見出すことができる。アイルランドの結婚風習の中で縁組の大きな焦点になる持参金、かなり近代にい

たるまで家畜を贈る習慣、身分家柄問題、女性の地位等についても、その背後にブレホン法の影響があったことが理解出来よう。アイルランド＝キリスト教文化(カトリック)という公式でなく、ケルト文化が根強く生きづいているデュアリズムの文化を理解できよう。

アイルランドの伝説の中で、デ・ターナン族を中心とする「タレン三兄弟の冒険」に象徴される「殺人に対する償い」はアイルランドの古い法習慣「ブレホン法」を伝えている。

長腕のルーフの父キアンは殺される寸前にドルイドの杖を使って豚から人間の姿に戻り、タレン兄弟に向っていう。「さあ、今度は人間として申しあげる。もしわしを殺せば、その償いは豚の比ではござらぬぞ。お主たちに科せられる償いは、今までのどんな人間に払われた償いよりも重いものになりますぞ。お主たちが、いかなる武器にてわしを殺そうと、わしはその前にこのことを息子たちに伝えることができるのだが……」一方長腕ルーフは父の殺害の真相を知る。ダーナ王は勝利の宴席にルーフを迎える。その時ルーフは父の死について尋ねる。「大王、ならびに全ての貴族、騎士諸君。もしも諸君が自分の父親を殺されたとしたら、いかがなされるかおうかがいしたい。ダーナ王は答える。「自分の父を殺した者を殺すときには、一日や二日で済むようなことはしない。わしだったら、第一日目にまず腕の一本を切り、次の日に残りの腕を切り、さらに次の日に足を一本切り、という具合にして仇を討つ。」貴族達はみな賛成するが、ルーフは父の仇を討つのに生命までは要しないという。そしてそれ相当の償いを求めるという。「私の求める償いとは三つのリンゴ、豚の毛皮一枚、一本の槍と二頭の馬に一台の馬車、生きた豚七頭と一匹の小犬、一本の焼き串と丘の上で三度雄叫びを上げることだ。もしこれが重すぎるとお考えならば、一部を加減してさしあげてもよいが、そのようにお考えでなければ完全にやりとげていただきたい」と求め

24) “A History of English Law”, Vol. II, p. 32.

25) Hyde, Douglas: “A Literary History of Ireland”, p. 583. London, ERNEST BENN Limited, 1967.

26) 『アイルランドの民話と伝説』三宅忠明, p. 123-125, 大修館。

る²⁶⁾。上記の求める償いはそれぞれ象徴性があるが、結局タレン兄弟は死以上の苦しみで遇う。

上記の伝説の中で非常に他の伝説と異なるのは、殺人に対する償いが、目には目、歯には歯という償いではなく必ず他の代償を求めていることである。ケルトの慣習法即ちブレホン法に基づくものである。スコットランド、ウェイルズのケルト族同様に、アイルランドでもドルイド教の信仰が行われ全国土に普及していた。特にアイルランドではブレホン法に保障された族長の権威と権利が強く反映された。歴史学者ベケットはブレホンについて次の様に述べている。アイルランドのケルト社会は貴族的社会であったから、その法体系は、権利や判例集が法律専門の階層であるブレホン達によって集成され、注釈され確立された。そしてブレホンとは一般的に彼らになぞらえてブレホン法と呼ばれるに至った法律の専門家たちのことである。しかもこの法には刑罰規定がなかった²⁷⁾。したがってブレホン達は裁判官というより、その法の執行人であって、個人的実力行使によったり世論があって初めて強制力を持つことができた。

当時のアイルランド社会はいくつかの階級社会（貴族及び平民階級）に分かれ、貴族階級は三つに分かれる²⁸⁾。(1) *rí tuaithe* (リ トウイヘ) 即ち一種族 *tuath* (トゥアク) の王、(2) *rí ruireach* (リ ルエリヤハク) 即ちいくつかの種族及び地域の王、(3) *rí ruitreah* (リ ルエトリヤハク) または *rí cóiced* (リ コエケエト) 即ち地方の王。この *tuath* の支配者が王であり貴族である。平民階級は貴族と隷属平民の様な関係であるが、それぞれ法権利を保持して何人も侵害できない。行政、統治の最小単位も *tuath* (トゥアク) で昔から慣習を遵守して伝統を重んじた。パワーもブレホンの役割を次の様に述べている。法律家達は法規を記録してそれぞれ解説して、事件が起こると原典を調べ正しい訴訟手続きがなんであるかを決定した。法の施行は不服当事者側の同族（親属）の権利

(business) であった。そこには牢獄も成文契約も証文もなかった²⁹⁾。このブレホン法に統治された階級社会はそれぞれ法律上代償 (price) が決められていて、一般にAがBに対してある犯罪を犯した場合、財産刑はその起訴人の身分ランクと価値によって決められた。即ち *enechlann* (エネ克蘭) 身分代償 (honour-price) というものである³⁰⁾。男性あるいは女性に対する軽罪 (misdemeanour) を含むいかなる罪も、財産刑が重大さ (程度) によって換算される。また身分代償に似ている一種の償いを意味する *dire* (ディエラ) または *corp-dire* (コルプディエラ) と呼ばれる財産刑もある。

rí の身分代償は 7 *cumals* (クマルシュ) (7人の女奴隷) で、その妻の場合は半額となる。殺人のような重罪はその特殊範疇に属するもので *éraic* (エラエク) と呼ばれる。この言葉は慰謝料 (blood-money) と訳される場合もあるが実際は支払い方法 (out-payment) という意味である。傷害罪の場合、傷害の程度によりエラエクが勘案される。死刑 (capital punishment) という合法的殺人刑はなく、7 *éraic* という支払が自由人に対してランクに関係なく行われた³¹⁾。*rí* に対して 7 *cumals* (クマルシュ) が最高身分代償である。従って *cumal* (クマル) というのが最高価値単位である。実際には女性がその取引で交換されたのではなく、一人の女奴隷は 6 *sets* 即ち3頭の乳牛 (milch cow) または6頭の若雌牛 (summer-heifer) で代替する。ブレホン法当時の社会は乳牛が富の代表であり、貨幣価値の基準をなすものである。このことは *Cattle* という言葉が財産という意味であったことからうかがえよう。「タレン三兄弟の冒険」の中で長腕ルーフの代償を求める理由が理解できよう。

ここに記述されているものは、すでに述べている通りパワーの「古代社会における性及び結婚」を中心としている。そして古代社会にも現

27) 『アイルランド史』J. C. ベケット, p. 14, 八潮出版。
28) "Sex and Marriage in Ancient Ireland" p. 8.

29) Ibid., p. 8.

30) Ibid., p. 8.

31) Ibid., p. 10.

代社会と同様に様々な問題があったことを知る。そしてセックスそのものをどの様に捉えていたかその一端がうかがえる。

性器切除に対する財産刑にも二種類の身分代償がある³²⁾。陰のう切除の場合は corp-dire (コルプディエラ) 代償、左辜丸の場合は生殖機能があるとされ、corp-dire 代償。右の場合は程度に応じて、また聖職者及び虚弱者の場合は生殖の必要性がないので損傷の程度に応じて代償する。強姦罪にも二種類ある。女性を性欲にまかせて強奪する場合と睡眠中に同意を得ずなんらかの策略を用いて関係する場合である。この様な場合強姦者及び一族の者に財産刑の負担義務が課せられる。被害者の家族及び一族はその処置が遂行されるよう画策する。加害者が一定期間猶予の後、支払を怠った場合起訴人が現われて、戸々で断食して現代的取立て法を用いる。なお頑強に支払をしない場合、評価価値のあるものが取り上げられ、加害者は一種の家畜として追放される。多分そのような事態になれば流血騒ぎが起こったかも知れない。しかしいかなる種類の投獄も体罰問題もなかった。

一方ブレホン法の corp-dire (コルプディエラ) や身分代償の権利を剝奪された女性達の興味ある七つのタイプが記されている³³⁾。(1) 盗みをする者。初犯は 1/3 の権利、3 犯で全部剝奪。(2) 痛烈な嫌味をいう者。(3) よこしまな女。(4) 悪口をいわれて、人々が懲らしめざるをえないような虚偽の話の持主。(5) 田舎の茂みでセックスする茂み娼婦。ブレホン法では売春婦、醜業婦に同情はなく、更に二つの区別がある。一つは不貞の女。もう一つは日夜を問わず数名の男と関係する相手を選ばぬ淫売 (harlot)。(6) 人の心を傷つける女。(7) 大変ケチで乞食に食物を与えぬ女。従って昔のアイランドの女性に対する 7 戒は次の通りである。(1) 盗むなかれ。(2) 人を中傷、非難するなかれ。(3) 身内を裏切るなかれ。(4) 嘘、悪口を拡めるなかれ。(5) 汝を求むる者と寝るなかれ。(6) 他人に刃物

を向けるなかれ。(7) 食物を乞う者に食物を、情を乞う物に情を拒むなかれ³⁴⁾。結婚生活では男性が主導的役割を果たすので、ある面での肉体的欠陥及び障害が結婚生活を妨げる場合がある。7 つのケースが記されている。その中で(3)と(4)は同じ範疇に入るものであるが、7 という数をブレホン達は好んで用いたために別項目となっている。(1)不妊者。(2)インポテンツの者。(3)聖職者 (五世紀以後キリスト教の影響による)。(4)司祭。(5) Téní (テニ) と呼ばれる自由人に適用される土地を所有しない者 (rockman)。(6) 肥満の者。(7) claenán (クラエナン) 異常者の意味で相手の閨房を吹聴するもの³⁵⁾。男のランクは次の様に決めている。(1) aire forggall (アイラ フォルゴル) (貴族階級の最高位), aire túise (アイラ トウシェ) ((1)に次ぐもの), aire désa (アイラ デシャ) (貴族階級の最下位), bóaire (ボアイラ) (自由人) となっていた。

結婚適齢期の若い男女は婚姻契約が成立するまで別々にされる。ミース県テレタウンに Bride-Price の丘といわれるような場所で持参金が支払われた。テレタウンの古い伝説によると、結婚が行われたことから Marriage Hollow と名づけられたという。また伝説「エマの口説」によると、「私には先に嫁ぐ姉がいる」と英雄クフリンに語っていることから、年齢に従って長女から順に結婚する習慣があったことが推測される。事実アイランドでは男も女も年齢順に結婚することが普通である。(かなり高齢になっても上が片付くまで待っている。)

結婚あるいは結婚相手 lánamnus (ラナマス) に関する十ヶ条の規定があった³⁶⁾。(1) 同じランクの人との結婚。(このタイプが奨励された。)(2) 男の財によって養われる女。(異なる階層による結婚)(3) 女の財によって養われる男。(男は女のもとで労働、耕作、家畜の世話をしなければならない。)(4) 妻の形式で受入れられる女。(内縁として権利が守られる。)(5) 女と関係す

32) Ibid., p. 14.

33) Ibid., p. 19.

34) Ibid., p. 19-20.

35) Ibid., p. 25-26.

36) Ibid., p. 28-29.

るが同棲しない男。(互に扶養しない。)(6) 誘拐された女。(本質的権利を有し、本人及び子供も法によって守られる。)(7) 移動する兵士とその女。(これまでは地方農村社会の人間関係であったが、この場合は地域定着型でない人々に関するもの。)(8) 策略または睡眠中の関係及びその行為によって生まれた子供に対する責任。(9) 狂人の場合。痴呆または狂人間の関係。(10) 暴力による行為。(女性及び親属に対する代償、子供は認知される。)

上述の規定にある通り、男女共に同じランクの結婚が奨励された。そして *cétmuintir* (キアトムインタ) (本妻もしくはその待遇) の婚約に関する約束 (contract) があって次の様に決められていた³⁷⁾。

(1) *coibche* (コエブチエ) 新婦の基本的持参金で、夫になる者は最初の年に相手の父親に *coibche* (コエブチエ) を払う。父親は親属の長と分ける。二年目は妻に 1/3 (その父親と長は残りを分ける)、そして 21 年間夫は妻に払いつづける。妻は夫の財産の他にその個人的財産を得ることになる。21 年間という時の長さは十分な結婚生活を意味するし、もし夫が相手を変えても十分な代償と考えたのかも知れない。昔アイルランドの王は女性と寝たい時には相手に *coibche* (コエブチエ) を与えたという。(2) *tinól* (ティエノル) この持参金は、新婦への一種の結婚プレゼントでしかも友人、知人から贈られる。その時代の代表的財産、牛が主で、父親が 1/3、残りが新婦に与えられる。(3) *tinchor* (ティエンコル) 新婦の持参金で主として家具とか生活に必要な品物である。(4) *tinscra* (ティエンシュクラ) 新婦が *tuath* 以外の出身の場合、その父親に与えられるもので、牛とか家財道具と違って持ち運びが容易な品物、金、銀、銅、真鍮類である。

(五) む す び

ヤンセニズムがかなり強く作用してアイルランド人のセックスが歪められているといわれる。

しかもそれはカトリックの影響によるものだと一般的にいわれている。しかし歴史的には数世紀に渡るペナル法によるカトリックの布教禁止によって、一般のカトリック教徒がその教義の影響を受ける程大きなものであったとは思えない。アイルランドでは今日でも婦女暴行事件が極めて少ない。もしこの様な犯罪を犯した場合、その地域に住めなくなる程の弾圧を社会から受ける。セシル ウダム スミスの「大飢餓」の中に次の記述がある。「あの 1798 年の反乱の後ですら、野山をなんの妨害もなく勝手に歩き回ることが出来た。イギリスでは女性が森とか野原を歩き回ることなどできない。それにボリナ橋で、反乱軍に参加したアイルランド人がイギリス軍によって絞首刑にされているというのに。³⁸⁾」これはブレホン法の婦女暴行規定にあるように、その責任を本人及び親属一同が負うという歴史的習慣によるものと解釈した方がよいであろう。

さらに結婚に関する様々な風習、特に結婚の条件としての持参金に関する話合も、ブレホン法の規定がたとえ現実的意味あいを失っても生きていたと考えられる。ウェイクの場合と同様に、アイルランド＝キリスト教文化と単純に公式化できないアイルランドの中に内在するケルトのデュアリズムの構造を、結婚の風習の中に見出すことができる。ブレホン法の規定にある通り男女互いに同じランクの結婚が望ましいからこそ、世情にたけ、慣習、風習に精通した年長者が仲人として活躍する必要があったのである。仲人が縁組(持参金を含めてあらゆる問題)をまとめる様子が理解できよう。

Summary

Among the happy noises everyone enjoys at the Irish wedding can be found many marriage customs like the courtship and love-making which were normal features of old-time wakes ; the matchmakers who

37) Ibid., p. 30-31.

38) Woodham-Smyth, Cecil : "The Great Hunger", p. 20, New English Library, 1970.

were prepared to act as go-betweens arguing over the dowry and other details of the marriage settlement ; the abduction or other matters carefully arranged by the parents, relatives, and friends ; the bottle races ; the strawboys ; the bride show.....

The above-mentioned customs show that the old Celtic tradition was still alive in the days when W. Carleton spent his youth attending dances, wakes, and weddings. P. Power wrote "of an Ireland in bygone days where the Christian religion was accepted and where whatever pre-Christian

religion in existence beforehand had given way to the new system of belief brought in from Europe" in his book, "Sex and Marriage in Ancient Ireland." The world ruled by the Brehon Laws must, however, have been very peaceful because there were no jails nor written contracts or indentures. The Irish had had a rich historical and cultural heritage until the mid-1800' s. But the Great Famine brought radical changes in rural Ireland and marked the end of an era that may well be termed pagan Ireland.